天ノ香久山所在有異說、未決定、今興善寺之西、有名南浦處、其地有天磐戸、其前有神樹、其少南有叢篠、名之湯篠、祭禮時必用榊及湯篠云々、蓋以石凝姥命、取天香久山銅鑄日像之義、立名耳、天磐戸亦然矣、

〔鋸屑譚〕萬葉集、香具山歌云、天降付天之芳來山、又云天降就神之香山、風土記云、天上有山、分而墮地、一片爲伊豫之國之天山、一片爲大和國香山、晉西天僧惠理、登杭川飛來峯、嘆曰、此是中天竺國靈鷲山之小山嶺、不知何年飛來、因名之、之と同日之談也、

〔冠辭考一〕あもりつく　あめのかぐ山　阿

万葉卷三に、香具山の歌　天降付、天之芳來山、また天降就神の香山云々、猶多かれど略きつれこは風土記に、天上有山、分而墮地、一片爲伊與ノ國之天山、一片爲大和國之香山といへり、思ふに神代紀に、美濃國の喪山は天より墮たるてふ類ひに、是も上つ代より、云かいひ傳へしなるべし、云かればいづこはあれど、香山は初國しらしゝ御時より、皇宮の鎮めともいはひ給ふからに、ことにたふとみて、天降著てふ語を、いひ冠らせしなるべし、さて安毛利都久は、安麻久太利都久てふ語なるを、約め略きていふ也、安麻久太利の麻久を反せば牟となるを、廻らし通はして毛といひ、且太をば略きたるなり、此語は卷二十に、天孫の天くだらしゝ事を多可知保乃多氣爾阿毛理之、須賣呂伎能可未能御代欲利、卷二に、天武天皇吉野より和射見美濃へ幸給ふ事なる我原乃行宮爾安母理座而、天下治賜などもあり、〇中略

天ノ香山は、大和國高市郡にあり、且此山は、古事記に、倭建命の御歌阿米能加具夜麻とあり、同じ記に、天を阿麻と訓べきをば、そのよし注し分て、他の天は、皆あめと訓ことを、知しめたるなどに依に、此山は、古へは阿米の加具山と唱へし也、又香山此ハ云介遇夜麼と神武紀に注し、古事記に加具とかき、香土を訶遇突智とかけるなど、かくのくを濁ること明らけし、集中には、訓にまかせて、香來山、香久山など書たるは、假字なるを、後世人香の來る事也といひ、且かくのくを清て訓などは、皆よしなし、